

平成 26 年度 第 2 回 石狩市社会教育委員の会議 議事録

日 時 平成 26 年 10 月 8 日 (水) 午後 2 時～3 時 45 分

会 場 石狩市公民館 第 1 研修室

出席者 委員長：木村 純 副委員長：大橋 修作

委員：相馬 保、山田 治己、小條 智英美、福士 志穂、大黒 利勝、古村 えり子、
平 紀子、片山 あゆ美、高橋 美恵子

事務局：生涯学習部長 百井 宏己

社会教育課(兼公民館)

：課長 東 信也、主査 斎藤 晶(兼社会教育主事補)、主査 須藤 洋一、主査 富川 雅枝、
主事 本庄あゆみ

社会教育主事：西山 隆之(兼社会教育課主任)

傍聴 無し

1. 木村委員長あいさつ

皆さんお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。朝晩大変寒くなって、秋があつという間に過ぎていく感じがします。さて、皆さんには第 1・第 2 分科会に分かれて議論していただき、本当にありがとうございました。今日はそれに基づいて討論しますので、よろしくお願ひいたします。

2. 報告

(1) 平成 26 年度北海道市町村社会教育委員会等研修会

木村委員長：それでは会議次第に基づいて進めさせていただきたいと思います。まずは報告事項として、会議の出席について、大橋副委員長に平成 26 年度北海道市町村社会教育委員長等研修会にご出席いただきましたので、報告を宜しくお願ひいたします。

大橋副委員長：それでは、資料に基づいて報告させていただきます。研修は 7 月 7 日、8 日の 2 日間に渡って行われました。テーマである「人と人との繋がりをどう広げるか」は昨年度と同じテーマでした。今年度は「笑顔で元気で楽しく語り合うために」という内容で講演していただきました。

詳しくは資料に記載してありますが、講師である「こころの元気研究所」鎌田敏所長は、大変お話の上手な方でした。内容を簡単にまとめると、一つは「コミュニケーションを楽しもう」という話でした。お互いにコミュニケーションをとるためのきっかけづくり、そして、レクリエーションから始まりました。丸の上に線を書くように指示があり、私は丸の上に線を書きましたが、人によっては丸にくっつけて書く方など多種多様でした。図形一つ書くにも、人それぞれ色々なやり方があるというところから講演が始まりました。この方法は、色々な場所で実用できると思いました。

また、人に「どんな色が好きですか」と聞くと、赤や青など色々な色を選ぶわけですが、例えば赤を選んだ人はエネルギーだとか、青を選んだ人はこうだ、と言って場を和やかにしてから、色々な話に広げるという方法を紹介されました。

他にも人ととのつながりとして何点か話がありました。笑顔が大事であることや、聴くことは相手の話を引きだす能動的なコミュニケーションだとも言っていました。相手の話を分かろうとするのではなく、相手の気持ちを汲み上げることが大切である、ということです。コミ

ユニケーションで大切な事は、相手の発言を否定・批判しないこと、質より量が大切であること、全員メモを取りながら話しましょう、ということも話されておりました。

例えば、トイレ掃除などをしてくれている人には、いつも感謝の念を伝えることから挨拶は始まるということなど、やはり質より量で話をするということ、楽しみながらコミュニケーションをとっていくことなどを学びました。

二日目には、小グループに分かれて協議しました。これまでではグループごとにテーマが異なっておりましたが、今回は全グループ同じテーマで行い、各グループの話し合いの結果を発表しました。昨日の講演を聞いた上で、人と人とのつながりをどう広げるかがテーマでした。5～6人が1グループとなり、体験話や人と人とのつながりの必要性について、また、つながりを広げるために、自分の地域でどのようなことをしていけば良いかなど、各地域で活動されている方々と話しました。石狩市の「社会教育委員と学ぶ市民講座」は、大変有意義な取り組みであると改めて感じました。

(2) 石狩管内教育委員会協議会社会教育共同事業「平成26年度社会教育関係等研修会」

木村委員長：それでは次に、新篠津村で開かれた石狩管内社会教育関係職員等研修会についての話を相馬委員からよろしくお願ひいたします。

相馬委員：7月に新篠津村で開催された研修に参加させていただきました。私が思ったことを交えて、かいつまんで報告させていただきます。

元新篠津村教育委員会次長の原田志郎氏による講演がありました。私は原田先生には何年か前にお会いしたことがございまして、色々話をしたことがあるのですが、今回、特に私が思ったことは、「ものを作ること、楽しく仕事をすること、個人個人が何事に対しても目標を持つこと」という言葉がありました。地域の中での個人個人の力というものは色々ありますが、皆さんが持つ力を、地域の中で話し合いながら、どのように力を合わせて、どのようなことを一緒にやっていくか、という話を聞いて、なるほどと思いました。

「地域では住民との関わりをいかに持っていくか」が大事である、とのお話をありました。いかに地域住民との中に溶け込んでいくか。そうすれば色々な場面で色々な話ができる、地区の輪になっていきます。私は地元で、自分自身は住民とのつながりを本当に持っているのかと、つくづく感じました。言葉にはできても、自分自身で行動するのはなかなか大変だと感じておりますが、しかしそれではまずいのです。個人個人の力をまとめて、自分自身も含めた地域の中で活動しながら、地域住民と関わりを持って行くことが大事だと感じました。その際は一人ひとりが自分の考え方を持ちながら地域の中に入していくことが大事だと感じます。

原田先生の講座での地域的な話に加え、社会教育行政の職員の方々からも、色々な活動のお話を聞きました。それぞれの課題がある中で、地域に溶け込んでいくというのは大変だ、と思っていたのですが、どんな仕事をしていようと、個人個人は地域の住民であるわけです。自分で自分の足を運んで色々な人とお付き合いをし、意見を交換しながらやっていくことが大切だと感じました。1つでも2つでも、地域の中で実践できたらいいのではないかと感じて帰ってきました。

実例発表は、三人の方が発表されました。1番目に石狩市民図書館ボランティアサークルの方から、布の絵本作りの発表をしていただきました。布の絵本は色々な発色があり、自分の地元でやるとしたらなかなか大変だと思いましたし、発表者の方も、子どもを相手に活動するのには大変なことだったろうと思います。しかし布の絵本というのはいいアイディアだと思いました。色もきれいですが、これからは子どもと大人の生涯学習になると感じます。こういったサークルに、大人も子どもも入ってきて、色々な作業をとおして学習の場ができればいいと感じて帰ってきました。

2番目には、当別の方から発表がありました。当別町通学合宿実行委員会の近藤さんからのお話をしました。近藤さんは、他にもサークルや、地域、学校など、他にも色々な場所で生涯学習を実践しているようですが、行政の方がもっと住民との関わりを持つことが大事だとお話ししされていました。市民と行政の関わりについては、報道などで文章化はされておりますが、実際に行動しているかというと、私個人もそうではないという気がしています。発表された方々の話を聞きまして、役所がどうであろうと、これからは個人個人が、地域住民の一人として、生涯学習に関わることを進めていかなければないと感じました。

3番目に、生きがいというテーマで、新篠津村で農業を営んでいる吉岡さんが話しておりましたが、子ども達が少なくなってきており、農業に関わる者としても心配されておりました。過疎化で人口が少なくなっている中で、今いる地域の人たちで話し合いながら、いかに地域で子どもたちを育てるべきか。この事は色々な面で問題提起されていますが、少ない子ども達であっても、もっともっと地域住民が関わりを持っていけば、各地域の色々な面での発展につながると思っています。私は常日頃から考えておりますが、「挨拶から始まる」ということがポイントなのだと思います。今回の研修では色々な面で勉強になりました。全部は無理でしょうが、今回学んだことで1つでも2つでも出来ることがあれば活かしていきたいと思っております。

3. 議題

木村委員長：それでは次に、議事に入ります。今年度の第1回目の社会教育委員の会議の中で、昨年度実施した社会教育委員と学ぶ市民講座の各テーマについて、次年度の石狩市教育プラン後期基本計画に反映させるために、複数の分科会に分けて検討することになりました。

第1分科会は「地域の高齢化と高齢者の孤立を防ぐ活動」と「石狩市のコミュニティの現状について」、第2分科会は「みんなで考えよう子育て支援」と「地域社会と学校支援」について、それぞれ活発な御議論をいただき、誠にありがとうございました。その結果を、事務局と私とでまとめたのが、皆様のお手元にある提言書案です。第3分科会については時間の関係上、委員が集まって議論することはできませんでしたが、担当委員の間で連絡を取りながら、私がまとめた案を、皆様のお手元にお配りさせていただいております。

本日は、この提言書案をもとにして、私たち社会教育委員から、教育委員会に提言する内容について、皆さんの御意見をいただきながら、固めていきたいと思います。

それでは次に、提言書案について、事務局から説明いただきたいと思います。まずは、第1、第2分科会についてお願ひします。

斎藤主査：【事務局から第1分科会の提言書案について説明】

西山社会教育主事：【事務局から第2分科会の提言書案について説明】

木村委員長：【委員長から第3分科会の提言書案について説明】

木村委員長：それでは次に全体協議に入れます。第3分科会は皆さんにお集まりいただいて議論する形式で行われておりますので、本日この場をお借りして皆様のご意見、ご指摘を頂ければと思います。なお、いずれの分科会の内容も、お互いに関連がありますので、どの分科会からでも構いませんので、ご意見をいただきたいと思います。今日の議論を踏まえ、事務局と私で文言を修正した上で、10月下旬に予定されている教育委員との懇談の場で、提言書をお渡しするという流れを想定しております。

高橋（美）委員：内容は良いと思います。近所の様子ですが、以前に閉店した、とある店舗跡で2、3日前から工事が始まって、11月に再び開店するようです。提言書案にある「身近な集いの場を作る取り組み」については、自分としては地域で努力をしています。

木村委員長：町内会単位には、町内会館のような施設は大体あるのでしょうか。老人クラブなどはそこで活動しているのでしょうか。

高橋（美）委員：町内会館があつて、老人クラブなども活動しています。私のところの話をすると、第6町内会の中に高齢者クラブ寿光会という会があります。私も所属しておりますが、毎月例会をやつていて、旅行にも行っています。また、市内の高齢者の繋がりがあつて、スポーツ大会や、パークゴルフ大会もあります。10月23日には北コミで芸能発表会があるほか、フラダンスやフォークダンスもやっています。私は6月から歌声を始めました。中学生以下は無料ですが、大人は1回100円で誰でも参加できます。今のところ黒字です。

木村委員長：市民の人たちが色々な学習活動をしたいと思った時に、会場が借りられなくて場所で困ることはありますか？

高橋（美）委員：多人数などで、北コミのあの部屋でなければダメだというような場合はあると思いますが、50人くらいの規模であれば、あちらこちらに場所はあるので、どこかは空いていると思います。

木村委員長：そういう時は、例えば公民館に行って、どんな会をやりたくて、どこか空いてる場所は無いかと聞くのでしょうか。

高橋（美）委員：自分で直接会場に聞いて探しますね。

木村委員長：全部自分でやらなきゃいけなのですね。どこかに聞けば、必ず市内のどの施設が空いているかが分かるような情報ネットワークを作ったらしいのではないですか

高橋委員：そこまで申し込みが殺到するほど、ニーズがあるのかわかりませんが、施設を探すのも、それほど大変ではないと思います。

斎藤主査：町内会館はいくつか部屋もあるので、何とか間に合っているのが現状です。

大橋副委員長：私は退職校長会に所属していて、年に3～4回集まります。北コミよりも町内会館を使うことが多いのですが、地域の町内会館は地域の人以外でも全市的に利用ができる、融通がきくのは良いと思います。交通の便では、南一条やひまわり会館など、バス通り沿いにある施設が利用しやすいのですが、住んでいる地域に関係なく、空いていれば使わせてもらえることは良いと思います。

木村委員長：全ての町内会館がそういう使い方ができるのでしょうか。

高橋（美）委員：できると思います。町内会館と言うのは、町内会が管理を任せているのですが、収入が無ければ赤字になるので、出来るだけ使ってほしいのです。カラオケでも何でも、家族ででも、出来るだけ使って下さいと呼びかけています。

山田委員：根底には高齢化があって、全てに関わっていると思うのですが、石狩に住んでみたいと思わせるような施策が無いとつらいと思います。例えば今北海道の中でも、住宅を新築した場合、300万円の補助金が出る市町村もあります。何か具体的策を持たないといけないと思います。また、若者と石狩を繋げることも必要です。北海道は合計出生率1.26と、全国で2番目に少ないです。15歳から49歳年齢はどんどん減っていきますから、2.07人産まないと人口減少が起きると言われている中で、市として、どんな出生率を上げるために施策を考えているのだろうかと思います。離婚率も北海道は全国3位と高いです。離婚はこれからも起きるのでしようから、ひとり親をどう支援するのかということが問題です。生活保護も含め、色々なアクションを起こしていかないと、解決していかないと私は思います。机上の論理も大切だと思うが、行政としてはどのように動けるのでしょうか。

百井部長：結論から言うと、今、国がその問題で悩んでいるところです。答えが無いそうですが、都道府県ごとにその問題を考えなさいという事になっていて、北海道でも取り組んでいて、全道から関係者を集めて意見を聞く場があったそうです。ところが、なかなか名案が無いようです。ただ、今まで子育て環境の充実がポピュラーだったのですが、それだけではどうやら無理なのではないだろうかと気付かれてきております。ある意見では、究極的には仕事を増やすという点に戻ってきている状況です。

本市においては、ベーシックな部分として、子育て環境と、新港をベースにした働く場所、それから地域インフラなどの生活環境といったところを整えて、プラスして地域の魅力、自然、歴史や観光などに力を入れるということを現在取り組んでおります。最新情報としては、皆さんご存じかもしれません、樽川に100単位の住宅造成をスタートさせています。

地域格差はやはり出でますが、増える要素もあるものの、地域全体として出生率が下がるのは目に見えている。しかし、出生率が下がることが必ずしも悪いのかという議論もありまして、その点を含めて検討中です。

木村委員長：今までの議論の中では、例えば札幌で離婚した人が石狩に帰ってきて、一人親家庭で子育てをしているような現状があるのではないかとか、乳幼児期は色々な支援があるが、小学校高学年・中学・高校と上がった時に支援が少ないとといった現状が前提にありましたので、学童保育などの問題を議論していただきました。我々の提言としては、そういう問題に対処する市民の動きが生まれるきっかけになるような学習の場を作り、そのような活動や、情報提供のための場所が必要であるとの議論をしてきました。これらの事が提言書の中に盛り込まれてあると思いますが、皆さんいかがでしょうか。

大黒委員：厚田区は、だんだん人口が減り、高齢化が進んでいます。私は中学校に関わっているのですが、生徒数が22名と、危うい状況です。その中で、地域が活性化するためにはどうすればいいかを考えて、各団体が色々活動してきました。7つの団体が立ち上がったのですが、厚田にはキーポイントになる建物がない。それがなければ活性化しないという話になりました。そこで国土交通省の補助金で道の駅を作り、資料館や特産物など、総合的に取り組んではというアイディアも出ています。役場の職員もだんだん減っていって、危機を迎えるのではないかという心配もありました。人口減はピンチですが、アイディアも出ていますので、何とか活性化したいと考えています。

木村委員長：去年、厚田に伺ったときはむしろ、農業や漁業が頑張っていて、後継者も確保できているという展望もあって、過疎・高齢化が一方的に進んでいて大変な訳でもなく、担い手という点では見通しがあると感じました。むしろそうやって頑張っている人たちをうまく支援できる仕組みが必要ですね。

古村委員：質問ですが、一人親家庭での母親の職場という点では、石狩はどのような展望を持っていらっしゃるのでしょうか。厚田などは漁業が盛んで、水産加工などの職場があるのでしょうか。

東課長：具体的な数字や詳細は確認できませんが、先ほど部長から申し上げたように、新港という大きな企業団地がありますので、そこがまず一つかと思います。もう一つに、石狩は札幌に隣接しておりますので、就業圏内にあるという点かと思います。

木村委員長：例えば、親の家に同居しながら通うなどがありますね。生活費も安くなりますし。

高橋（美）委員：ちらりと耳にしたのですが、最近、石狩地区にグループホームが非常に多くなったそうです。

百井部長：ええ、増えましたね。

古村委員：ホームヘルパーの資格などのステップアップで援助するのはいかがでしょうか。

高橋（美）委員：資格に関係なく募集しているようです。実際の仕事は大変らしいですが。

木村委員長：仕事は大変なようですね。札幌市北区では、デイサービスセンターが乱立していると言われており、競争が激しくなって、どんどん潰れていっているという事もあるようです。

古村委員：私の母が高齢で、今は夫の所に帰れましたが、色々な施設を転々としておりました。やはり、職員が資格としっかりした志を持っている人でなければ、入所者もそこにいるのが嫌になってしまいます。資格が無い方でも働くような施設は、入居者が居つかないのではないかと思います。しっかり研修して、介護職員としての志を育成すれば、石狩に行けばいい施設があると評判になるのではないでしょうか。実際に、職員の資格の有無で居心地が全然違うと母も言っていました。

片山委員：介護職の方の相談はとても多いです。就労環境が悪いので、仮にモチベーションがある方が資格を持って就職しても、給料は安い、労働時間は長い、休みを取れないなどで、結局続かない、辞めたいという相談が増えていています。市の方で、市内施設の労働条件をきっちりと定めると、高齢者の方も居やすいですし、働く方も居やすいという win-win の関係になれるのではと思います。

百井部長：国でも、介護に関わる方々の人工費を上げなければならないと、補助を増やして、その代わり人工費を増やしなさいと言っていますが、実際には経営とのバランスもあります。建て前上は、人が大事なので賃金に上乗せするよう行政的には言いますが、賃金を増やして経営が傾いたら誰が責任をとるのかという話にもなるので、社会全体が窮している問題だと思います。

山田委員：石狩には山も海もあり、自然に恵まれていて、石狩の良さというのをもっと増やす必要があると思います。先ほどの若者の問題ですが、中学校に関しては、地元の子を地元の高校に少しでも多く入れる対策をしたほうが良いと思います。石狩南高校では、地元の子は 25% 位だと思います。75% は市外から来ているのです。少し前に石狩南高校の校長と話しましたが、もっと中学校に行って、PR して欲しいと言っていました。逆に当別だとか、あちこちの高校が石狩に PR に来ている。石狩の高校も、石狩の良さを子どもたちどんどん伝えていく必要があります。先程の新港などは、企業が 700 社も来ているのに、石狩の子どもがなかなか就職し

ない。札幌から大型車で従業員が大勢通って、札幌から働きに来る人がいるのだから、石狩の子どもを石狩にもっと定着させることを考えなければと思います。

木村委員長：新港で働いている人たちは札幌市民が多いのでしょうか。

山田委員：そうだと思います。

高橋（美）委員：追分通りなどを見ていると、朝の新港に向かう車の交通量はとても多いです。

木村委員長：長い目で見るとやはり、子育てがしやすくて、自然、例えば農業や漁業があり、住み続けたいという気持ちが高まるような魅力のある街を作るというのが、長期的には正しいと思います。基本的にはそういう考え方で提言書は書かれていると思いますが、社会教育としても、そういう視点のもとに、方針を打ち出すようにしたいですね。

古村委員：道新に掲載されておりましたが、猿払村では子育てへの関心が高いようです。道新には保育所のことしか書いていませんでしたが、ホタテ漁が盛んな町ですから、女性の働き場所が多いと思うのです。お金もあるのでしょうか。大切なのはやはり地場産業ではないでしょうか。

木村委員長：おそらく、石狩にはベッドタウン的な考え方があったと思うのですが、地域の産業をもう少し大事にしながら、地域で働く魅力と、札幌から届くという魅力。職場と暮らしの場所の両方と言えるのでしょうか。

大橋副委員長：人口の推移を見ると、60代以上の高齢者の数が増えていきます。市民カレッジなどを見ていると、現役時代、職場は札幌でしたが、退職してあらためて石狩の色々なところに行くようになって、石狩はこういうところだったのか、と分かってくる人が多いのです。逆に言うと、今、高齢者の方があらためて石狩の良さを学んでいるところだと言えます。そう考えると、高齢者にあらためて視点を当てて、高齢者の活性化という仕組みを考えることが大事かなと思います。また、高齢者の交通の便の話題も出ていましたが、当別では福祉バスというものが運行しています。バスが必要だという要望はあるのですが、実際に定期運行してみると、だんだんと利用者が減ってきたので、予約制にしたそうです。厚田の「ライフサポートの会」の例を見てもわかりますが、予約制の、福祉バス的な運用方が、よく利用されるのだろうかと思います。石狩市内の交通網を浸透させるためには、ある程度時間がかかるのだという事を感じます。

ぜひやっていただきたいのが、第3分科会の提言書に書いてありますが、高齢者の活動が活発な地域と、活発ではない地域があります。活発な地域は、毎年やっていることだからと、活動が当たり前になっていますが、他の地域から見ると、どうしてそんなに人が集まるのかが不思議に思われるのです。ですから、定期的な取り組みをしている町内会も含めて、交流する場が大切なのかと思います。

木村委員長：私は車を運転しないので、公民館に来るときはいつも、市役所と図書館とりんくると公民館を行ったり来たりするのですが、高齢者の方は大変だと思います。皆さん車で移動するでしょうね。そう考えると、高齢化が進んでいくと、運転ができなくなって大変になっていきますね。何か行事があるときは、定期的に皆が集まれるような暮らしにしていくのが大切かと思います。

高橋（美）委員：先日、中学校の音楽発表会があったのですが、中学生の数がとても減っているのでしょうか。1学年が30人台で、40人という学校がありました。

百井部長：それは出場者を選抜してきているからです。例えば花川中は4～5クラスあります。

高橋（美）委員：そうですか、勘違いでした。大橋副委員長から、高齢者を中心とした施策を考えてもいいのではというお話がありましたが、行政で進めるものだけではなく、我々社会教育委員の中でも、どうやって活気のある町にすればいいのか、この会議の場で、自分たちでも考えていくべきなのではないでしょうか。

木村委員長：全体的にそうあるべきだと思いますが、何かその要になるような考えはありますでしょうか。

高橋（美）委員：例えば、全国に石狩市がここにあることをアピールするために、石狩が鮭だけでなく、缶詰発祥の地であるという事をもっとアピールしてもいいのではないかでしょうか。人参や米などの農産物でも、石狩といえばこれ、と全国の人にイメージしてもらえるようなものがあればいいのですが。

木村委員長：大橋副委員長の意見にもありました、地域のことを知ることをテーマとして、〇〇学というものが注目されています。石狩では石狩学ですね。市民カレッジもそこを目指していて、定年退職してからようやく石狩の生活を楽しみたいという方が、いわゆる「地域デビュー」の中で改めて石狩のことを知ろうという動きがありますね。石狩が缶詰発祥の地である事は、私も今初めて聞きました。そういうことを市民の人たちがあらためて知り、連続的に学ぶという取り組みは、市民カレッジで色々やっていただいておりますが、例えば石狩学入門などのように、一年をかけて連続受講すると、石狩の大切なことが分かっていくような講座をやってもいいかもしれません。そしてそこで学んだ人たちが、「缶詰発祥の地」にまつわることを、皆でやろうという流れになるかもしれませんね。

高橋（美）委員：そういう事は、先頭に立って動く企業が必要だと思います。例えば佐藤水産が引き継いで、PRに動くかどうかですよね。

木村委員長：そこは市民が動かすのがよいでしょう。石狩がそういう活動が盛んである場所だと知った人たちが、何かやりましょうと集まって、佐藤水産を中心にになってくれるようにお願いする、という流れを作るのが社会教育です。

高橋（美）委員：佐藤水産が動くのではなく、市民の力が佐藤水産を動かしていくということですね。わかりました。

大橋副委員長：先日の鮭まつりに2日間行きましたが、感想としては、意外と石狩の人よりも、札幌を含めて、市外から来たの方が多いと感じました。缶詰や鮭の事も含めて、石狩市民よりも、札幌や当別、江別などの人の方が関心を持っているように思います。石狩といえば鍋だ、鮭だとね。石狩市民に対しても、関心の掘り起こしが必要なのではないかと考えます。花畔神社、南線神社がありますが、祭では出店や客ですごい人数が集まります。あれだけの人が集まってくるという事を、我々自身が知らないのです。今もあれだけ盛大に神輿を担いでいるのは、なかなか無いのではないでしょうか。

高橋（美）委員：厚田でもすごい神輿を担いでいますね。

大黒委員：札幌や色々なところから担ぎに来ていますね。

大橋副委員長：話を聞くと、その地域の人たちが担ぐのではなく、全道的な繋がりが出来ているらしいですね。赤平や札幌や小樽など、色々なところから来ているようです。お祭りがそういう実態のもとで行われているという事も、実際に行ってみないとわからないと感じました。

木村委員長：石狩、厚田、浜益を結んだ物語作りのようなことを、意識的にやらないとなりませんね。今まで石狩、厚田、浜益とバラバラにやっていましたが、同じ日本海で、鮭やニシンなどで繋がっているのです。それぞれがどう繋がっていたのか、市民が歴史を学びながら、石狩市民としてのアイデンティティを確立していくような学びが必要だと思います。

大黒委員：今回のあきあじ祭りのポスターは、すごくいいと思います。デザインも色彩も素晴らしい。

木村委員長：10月18日に札幌と小樽と石狩とで協力したツアーがありますが、間に合えば行ってみようと思います。札幌から出発でしたでしょうか。

相馬委員：第1分科会の平均寿命と健康の件ですが、それについて私も考えました。国でも考えているそうですが、健康寿命と平均寿命については、色々な講座があります。平均寿命はすごく高いのですが、健康寿命は短いのです。どこに原因があるのか考えていますが、いまひとつわからない。浜益では、男塾というものをやっておりまして、家事や料理など、色々な学習をしています。もっと事業を広げて、一人でも多く参加できる体制を作るには、行政も必要ですが、地域住民で、5人10人のグループを作って、どこでも行って、集まって、活動できるという環境づくりが大切なのではないかと思います。私はサーモンマラソンに参加しておりますが、先日の大会を見ると、石狩市民の参加者が少ないので。札幌や江別など、近隣地域からの参加が多いです。健康作りのための参加者も確かに多いのですが、ランナーの人たちが本当に多いです。優勝するという意気込みではなくて、健康づくりのために参加するのが大切なのです。毎年思いますが、マラソンというのはすごく力がある。こういうものに地域で参加できる環境を作っていくことが、特に健康寿命を延ばすのにはとても大切だと思います。平均寿命が伸びて喜ぶのではなくて、もっと健康寿命を延ばしていく取り組みが大事なんじゃないかと思います。

石狩市で取り組んでいるウォーキングにも私は参加しておりますが、歩くことは大切です。私は医者じやありませんが、健康を保つにはとても重要なことです。でも1万歩2万歩歩くのは結構大変です。私は地元で歩ける人、走れる人を集めておりまして、何とか皆で取り組んでいきたいと考えています。今は健康でなければなりませんし、健康は地域から盛り上げていきたいと考えています。

もう一つは、浜益区では未婚者が多いです。人口は少ないのですが、それでも未婚者が多い。今の時代、浜益区は特に出会いがないのです。3~4千人の人口がいた頃は、青年会が色々な催しをやっていて、そこに人が集まって出会いもあった。今の浜益区には、出会いの場所がなくなってしまっている。そういう事も少子高齢化に影響しているように思います。また、人口が少ないと子育てもなかなかつらいのです。そういう状況では、学校と関係のない人でも、地域の中で色々な繋がりを持つことが大切です。浜益には小中学校の校長先生が2人いますが、色々な地域、色々な場所で地域に参加してくれています。その姿を見ると、ああ、校長先生が一生懸命やってくださっている、という意識が住民に生まれます。話を聞くと、先生方はとても忙しくて、時間がなかなか作れないと言っていました。その中にあって地域に出てくれる校長先生を見ると、地域の人ももっともっと協力していかなければならないと思います。子ども達と、高齢者も含めた地域全体で知恵を出し合って、努力していかなければならぬと思

います。

古村委員：健康寿命を運動で伸ばしていくという話ですが、私は岩見沢にいた時に、空知婦人会館に集まっている女性にアンケートを取ったことがあるのですが、一番困るのは冬だと言っていました。冬に歩いて転ぶと大変なことになるので、冬は運動したくないのだそうです。冬の運動の場所を確保するのが大切だと思います。

岩見沢市は市民向けに体育館にマシンジムの器具を置いているのですが、指導者がいないことが問題なのです。マシンジムの器具は、指導者がいないと使い方が分からなかつたり間違えたりして危ないと思います。石狩市にはスポーツクラブはあるのでしょうか。冬の運動場所と指導者は確保する必要があると思います。

山田委員：提言書に地域の宝と記載されておりますが、私は石狩の宝はたくさんあると思います。例えば石狩には道内有数の油田がありますが、ほとんど知られていない。採算が取れないので採掘はしておりませんが、そういうものが石狩にはたくさんあります。そういう宝を探して、道内外に発信できないかと思います。しかし、石狩市民カレッジの場合は、若い人がいません。皆さん、定年になっても65歳くらいまでは仕事をしているのです。ですから参加者の中心は70代なのです。皆さん健康で元気ですが。だからこれからも、高齢者の対策もやって活性化していく必要があると思います。しかし、やはり石狩の宝をもっと探して、発信して、外から人を呼んできたいと思います。石狩は集客力もあるし、今年開催した新港20周年イベントなんかは10万人以上来ました。人口6万人の町に、10万人も来るのです。先ほどお話に出た鮭まつりなども、すごい人数が来ています。そう考えると、石狩の魅力はたくさんありますので、市民カレッジが持っている石狩学などを活用して、魅力を探して発信することが必要かと思います。

高橋（美）委員：探して発信して、若い人たちが働く場所を確保して、石狩市にお金が落ちるようにならないと、人が通過していくだけになってしまいますね。

木村委員長：そうですね。私は、小樽と比べて石狩が弱いのは、アクセスだと思います。

高橋（美）委員：バスでも回れるような方法を、市ではなく、観光協会がもっと石狩の魅力を発信するような方法を持っていないのでしょうか。学ぶというよりは、楽しんで回る、という形で。

木村委員長：市外から来る人ではなく、石狩市民がそういう楽しみ方をしないですよね。例えば、金大亭という老舗が私の学生時代からありますが、なかなか行きづらいのです。

高橋（美）委員：ちょっと敷居が高く感じます。

古村委員：金大亭とは何でしょうか。

木村委員長：石狩鍋の料亭です。鮭のフルコースが食べられます。道外から人が来るくらい有名です。ただ、地元の人はあまり行かないですね。お酒を飲んだら帰れませんし、そういう場所にあるのです。私としてはツアーを組んで行きたいですね。地元の人が気付いていない良さに気付かせるのが社会教育の役割なのだと思います。自分が分からなければ、札幌の人も呼べません。提言書もそういうことが柱になるような書き方をしたほうが良いですね。

相馬委員：教育委員会や商工会議所でも色々な事業をしている中で、このイベントをやればこのくら

いの集客が見込める、というような予想を立てていると思いますが、目論見通りの集客が来ているものなのでしょうか。

東課長：初めて開催するような事業は、それほど多くの集客を見積もっていないと思います。新港の10万人という数字は相当大きかったと思いますが、前年からやっているような企画は、それほど大きな揺れは無いかと思います。

相馬委員：石狩本町で大きいイベントをやるときは、浜益から送迎バスを出してくれています。しかし、せっかく出してもらっても、乗る人がほとんどおらず、参加者が少ないです。住民意識の問題もあるのかもしれません。逆に、厚田や浜益でイベントがある時に、石狩側からも厚田・浜益に向けた送迎バスを出して、足を運んでもらえると良いのではないかと思います。

木村委員長：行き来がしやすくなると、交流しやすくなりますね。

相馬委員：何でも、というのは難しいですが、イベントによってはやってみるといいと思います。そうすると浜益の人間も、理解してくれるようになるのではと思います。

木村委員長：そろそろ時間になりました。皆さん大変活発に議論していただきまして、時間が足りないくらいですが、皆さんからの貴重なご意見を入れ込んだ最終稿を、私と事務局で作ろうと思います。

全委員：異議なし。

木村委員長：ありがとうございます。なるべく皆さんのご期待に添えるようなものにしていきたいと思いますので、宜しくお願ひいたします。

4 その他

- (1) 社会教育委員と学ぶ市民講座（浜益区）について
- (2) 平成26年度石狩管内教育委員会協議会社会教育共同事業「フォーラム石狩」（北広島市）について

補足説明

- ・教育委員と社会教育委員の意見交流会
- ・第54回北海道社会教育研究大会について

西山社会教育主事：【概要について説明】

木村委員長：他にございませんか。それではこれにて平成26年度第2回石狩市社会教育委員の会議を終わります。

議事録は上記のとおりであることを認めます。

平成26年11月 7日

石狩市社会教育委員の会議 委員長 木村 純